

関山遺跡 I

SEKIYAMA SITE I

中央自動車道上野原インターチェンジ建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書(県道部分)

1988. 3

山梨県教育委員会

関山遺跡 I

SEKIYAMA SITE I

中央自動車道上野原インターチェンジ建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書(県道部分)

1988.3

山梨県教育委員会

序

本報告書は、中央自動車道上野原インターチェンジ導入路部分の建設に先立ち、1987年度に発掘調査された山梨県北都留郡上野原町地内の関山遺跡について、その結果をまとめたものであります。

本遺跡の位置する上野原町は、山梨県の最東端にあつて神奈川県と県境をなしております。遺跡南側を流れる桂川は、山中湖に源を発し、相模湖を経て相模川となり、太平洋へと注いでおりますが、この川によって形成された河岸段丘上には原始・古代より営々とした人々の営みを示す遺跡が多く分布しております。当地域は、古代において相模国と境を接する甲斐国東端の地域でもあり、「和名抄」に記載される都留郡の古郡、都留の2郷と福地郷の一部に属していたとされ、その繁栄を現代に残る遺跡や遺称によって窺うことができます。

今回発掘調査を行なった関山遺跡は、この様な歴史的環境のなかに存在し、当初から縄文時代及び平安時代の集落などの存在が推定されておりましたが、調査の結果縄文時代の遺構、遺物に限定され、縄文時代の住居址1軒、配石遺構1基、集石遺構2基、土壌16基が検出されました。また、発見された遺物は縄文時代早期から晩期の各期のものが存在し、付近に長期間にわたる断続的な人間活動があったことが明らかになりました。住居址はわずかに1軒ではありますが、その覆土中から出土した遺物は非常に豊富な内容を示しており、縄文時代中期後半期に関東地方と中部地方に大きく広がる土器文化圏間の人間交流の一端を示す資料を提示したと考えております。本報告書が、多くの方々の研究と文化財保護に利用して頂ければ幸甚です。

末筆ながら、種々ご協力賜わった関係機関各位、並びに直接調査に従事して頂いた方々に厚く御礼申し上げます。

1988年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯貝正義

例 言

1. 本報告書は、山梨県北都留郡上野原町関山地区内に所在する関山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、中央自動車道上野原インターチェンジ県道部分に伴う事前調査であり、山梨県教育委員会が県土木部の令達を受けて実施した。
3. 発掘調査および出土品の整理は、山梨県埋蔵文化財センターが行ない、同機関文化財主事田代孝、長沢宏昌、中山誠二が担当した。
4. 本報告書の執筆、編集は中山が行なった。
5. 写真撮影は、遺構を中山が、遺物を塚原明生（日本写真家協会）が行なった。
6. 遺跡内出土の石器の石材鑑定は山梨文化財研究所第4研究室長河西学氏による。
7. 本報告書に関わる出土品および記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
8. 発掘調査から報告書作成に至るまでに、同町内の田中久彌氏、長谷川孟氏にご教示、ご協力を頂いた。記して感謝申し上げます。

凡 例

1. 本書の遺構・遺物の挿図縮尺は原則として次の通りである。

遺跡位置図 1/50,000、調査区域図 1/3,000、遺構配置図 1/800、住居址 1/60、埋藏
1/20、炉址 1/30、土壌 1/40、集石 1/80及び 1/30、配石遺構 1/60、土器実測図 1/6、
土器拓影 1/4、小型石器実測図 2/3、打製石斧・磨石等 1/3、大型石製品 1/6

2. 遺構挿図内の水系レベルは海拔高を示す。

3. 遺物の記述・挿図について

石器実測図のスクリーントーンは磨り面を表す。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
第 I 章 調 査 状 況	1
第 1 節 調 査 に 至 る 経 過	1
第 2 節 調 査 組 織	1
第 II 章 遺 跡 概 況	2
第 1 節 遺 跡 の 位 置 と 周 辺 の 環 境	2
第 2 節 調 査 区 域 の 設 定 と 調 査 方 法	4
第 III 章 遺 構 と 遺 物	7
第 1 節 住 居 址 と 出 土 遺 物	7
第 2 節 土 壇	20
第 3 節 配 石 遺 構	25
第 4 節 集 石 遺 構	26
第 5 節 グリッド及び住居址以外の出土遺物	27
第 V 章 ま と め	35

挿 図 目 次

- | | | | |
|------|-------------------------|------|---------------|
| 第1図 | 遺跡位置図 | 第14図 | 1号住居址出土石器 (2) |
| 第2図 | 調査区域図 | 第15図 | 1号住居址出土石器 (3) |
| 第3図 | 遺構配置図及びハード・ルーム面掘り下げグリッド | 第16図 | 1号住居址出土石器 (4) |
| 第4図 | 1号住居址出土状況 | 第17図 | 土壌 (1) |
| 第5図 | 埋壁出土状況 | 第18図 | 土壌 (2) |
| 第6図 | 1号竈炉址 | 第19図 | 土壌 (3) |
| 第7図 | 1号住居址 | 第20図 | 配石遺構 |
| 第8図 | 1号住居址エレベーション図 | 第21図 | 1号集石 |
| 第9図 | 1号住居址出土土器 (1) | 第22図 | 2号集石 |
| 第10図 | 1号住居址出土土器 (2) | 第23図 | 出土土器 |
| 第11図 | 1号住居址出土土器 (3) | 第24図 | 石鏃及び骨製品 |
| 第12図 | 1号住居址出土土器 (4) | 第25図 | 打製石斧 |
| 第13図 | 1号住居址出土土器 (1) | 第26図 | 打製石斧及び磨石 |
| | | 第27図 | 磨石及び凹石 |

図 版 目 次

- | | | | |
|-----|-------------|-----|---------|
| 図版1 | 1号住居址 | 図版5 | 1号住出土土器 |
| 図版2 | 基本層序及び集石、配石 | 図版6 | 出土土器 |
| 図版3 | 土壌 | 図版7 | 出土石器 |
| 図版4 | 土壌 | | |

表 目 次

- | | |
|----|--------------|
| 表1 | 石鏃一覧 |
| 表2 | 打製石斧一覧 |
| 表3 | 磨石・凹石・石皿・その他 |

第 I 章 調査状況

第 1 節 調査に至る経過

- 昭和62年 2月13日 県文化課と第 1 回打ち合せ
- 昭和62年 2月19日 県土木部、県文化課、埋蔵文化財センター、上野原インター対策室による
現地打ち合せ
- 昭和62年 3月 6日 文化庁に発掘通知を提出する。
- 昭和62年 3月 9日 発掘調査を開始する。
- 昭和62年 4月 3日 県文化課と第 2 回打ち合せ
- 昭和62年 4月24日 県土木部用地課、県文化課、埋蔵文化財センターによる現地打ち合せ
- 昭和62年 5月 7日 発掘調査終了する。
- 昭和62年11月 6日 上野原警察署に遺物の発見通知（10月31日に調査終了の道路公園部分のものを含む）を提出する。

第 2 節 調査組織

- 調査主体 山梨県教育委員会
- 調査機関 山梨県埋蔵文化財センター
- 調査担当者 田代孝・長沢宏昌・中山誠二（上記機関文化財主事）
- 調査員 小林安典
- 作業員 高野俊彦・津田元栄・荒井一郎・山下芳信・鷹取睦雄・加藤政広・村野利夫・
和智幹一・楢島信子・市川好子・中村林太郎・荒井泉・中嶋高光・長田増雄・
星野晃・荒井貞・杉本チカエ・戸田杉子・水越茂子・佐藤淑恵・滝口成子・
山田早苗・塚原佳津子・横森輝子・市川好子・久島順子（順不同）
- 整理員 遠藤映子・石川操・若尾澄子・弦間千鶴・横森輝子・内藤真千子
- 調査協力 上野原町教育委員会・上野原インター対策室

第Ⅱ章 遺跡概況

第1節 遺跡の位置と周辺環境

関山遺跡は、山梨県北都留郡上野原町関山842他に所在する。遺跡は、山中湖に発した桂川（相模川）によって形成された河岸段丘の中段段丘面にのり、標高250メートルを測る。遺跡の南側は現在の桂川が流れる下位段丘面を望む断崖となっており、その比高差は約80メートルにおよぶ。また、遺跡西方には鶴川が南流し桂川と合流している。

関山遺跡を載せる中段段丘面は田名原Ⅰ面と呼ばれ、付近ではもっとも平坦な地形をなすが、遺跡の分布はその後背部の山麓と段丘面との接点にそって上野原小学校遺跡（10）、根本山遺跡（11）、桜ヶ丘遺跡（12）等の縄文時代、古墳時代の遺跡が認められている。また、遺跡対岸の鶴島においては縄文時代、弥生時代、平安時代の遺跡が点在する（26～29）ほか、鶴川右岸の中段段丘面にも縄文から古墳時代の遺跡（14～16）が存在する。この様に、同町内の遺跡は桂川、鶴川の河岸段丘面にもっとも多く分布し、それ以外は狭隘な山間部のわずかな平坦面や緩斜面に営まれる場合が多い。より巨視的に見れば当地域は中部山岳地方と南関東地方の接点とも考えられ、原始・古代における文化の流れや文化圏の接触を捉えるうえで重要な地域であると言える。

ところで、周辺は古代に於いて甲斐国と相模国との境に位置し、都留郡の古郡（ふるごおり）に比定されている地域である。「和名抄」によれば平安時代都留郡には相模・古郡・福地・多良・賀美・征茂・都留の7つの郷が記されているが、古郡は初期の郡家が存在しそれが移転した後に付けられた遺称であると考えられている。一説によればこの都留市の古川度に比定する考え方もあるが、現段階ではやはり上野原町内とする説が強い。同地の牛倉明神の慶長6年や元和8年の棟札に「古郡上野原村」と見え、同町和見に臨濟宗古郡江月寺があり、上野原の本町の南西に建暦3年和田の乱の加担して滅ぼされた古郡佐衛門尉安忠の館跡と伝える所があるなど郷名関係の遺称がこの地域に多いことが郷名比定の根拠となっている。この地域の西側には都留郷、福地郷に比定される地域が存在し、桂川流域に展開した古代の集落を遺跡の分布状況からも知ることができる。



第1図 遺跡位置図

周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	時期
1	椿和田遺跡	
2	小伏(穴沢)遺跡	縄文中期
3	黒田東遺跡	縄文中期
4	用竹(神戸)遺跡	弥生時代
5	用竹(殿村)遺跡	縄文早・中・後期
6	向風2遺跡	縄文後期・平安時代
7	小倉遺跡	縄文早期
8	八米遺跡	縄文時代
9	向風1遺跡	縄文前期
10	上野原小学校遺跡	縄文中期
11	根本山遺跡	縄文中期・後期
12	桜ヶ丘遺跡	縄文時代・古墳時代
13	塚場古墳群	古墳時代
14	上の山1遺跡	縄文後期
15	上の山古墳	古墳時代
16	上の山2遺跡	縄文中期・弥生後期
17	日野富士塚遺跡	縄文早期～中期
18	大倉遺跡	縄文前・中期
19	芦垣遺跡	縄文前・中期・平安時代
20	瀬測遺跡	縄文早期
21	平呂遺跡	縄文中期
22	中風呂遺跡	縄文中期
23	野田尻1遺跡	縄文・弥生・平安時代
24	西不老遺跡	縄文中期・古墳時代

番号	遺跡名	時期
25	野田尻2遺跡	古墳時代
26	黒の木遺跡	縄文中期・後期・平安時代
27	田代遺跡	縄文中期
28	東区遺跡	縄文中期
29	駒門遺跡	縄文中期・弥生後期
30	関山遺跡	縄文時代・平安時代
31	松留遺跡	縄文後期
32	ハツ沢遺跡	縄文中期
33	大門2遺跡	縄文早期
34	大浜遺跡	縄文中期
35	大門1遺跡	縄文中期・後期
36	仲山遺跡	弥生時代
37	牧野遺跡	縄文中期・平安時代
38	当月遺跡	縄文前期・中期
39	千足遺跡	縄文時代
40	河合遺跡	縄文中期
41	花坂遺跡	縄文前期・古墳時代
42	中屋根遺跡	縄文時代・奈良時代
43	東大野遺跡	縄文中期
44	西シ原遺跡	縄文早期・前期
45	大堀2遺跡	縄文早期・前期・中期
46	大堀1遺跡	縄文中期
47	狐原遺跡	縄文中期・弥生時代・古墳時代

『全国遺跡地図 山梨県』 文化庁 1981による。

第2節 調査区域の設定と調査方法

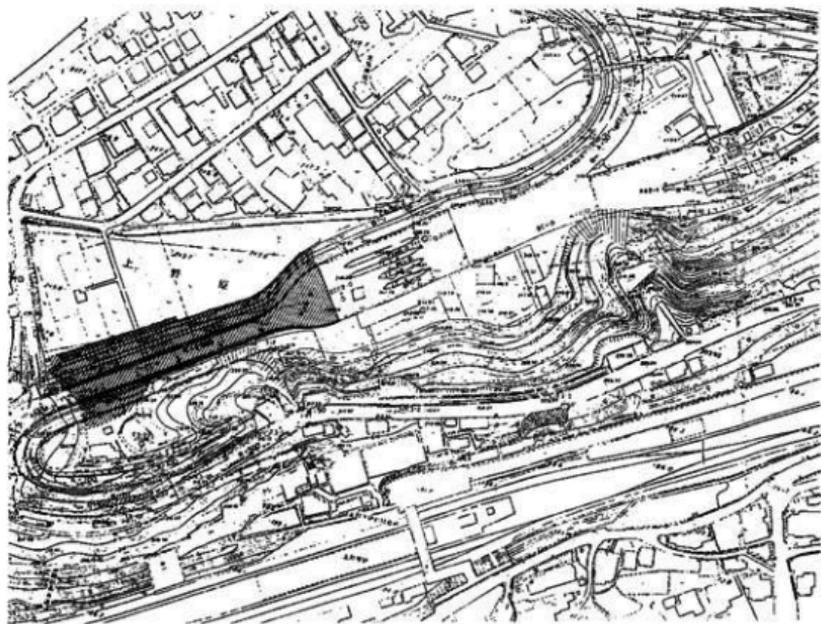
本調査の調査範囲は上野原インターチェンジから県道に連結する導入道路部分の約4000㎡の地域であり、調査区の南側には段丘崖が迫っている。調査区域は東西に130mと長く、南北の幅は20～40mを測る。この調査区全体に4m×4mを単位とするメッシュをかけ、グリッドを設

定した。グリッドの表記方法は、調査区の南西端を起点に西から東（X軸）に算用数字の1～3、南から北（Y軸）へアルファベットのA～Mの杭番号を設定し、グリッド南西杭を起点としてY-Xグリッドとする。

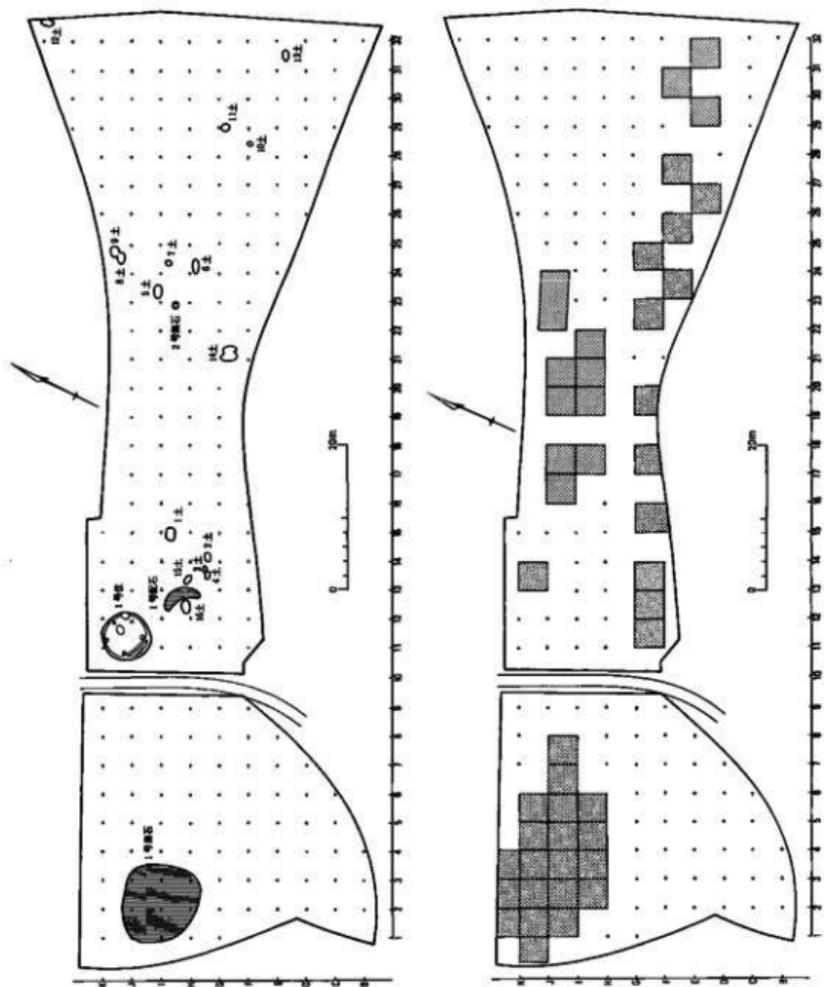
調査はまず対象地域全体の表土を削除し、遺構確認のための精査を行なった後遺構発掘を行なった。遺構の調査終了後さらに47グリッドに於いて遺構確認の掘り下げを行ない（第3図右）、ローム層中の先土器時代の遺物、遺構の検出作業を実施したが該期のもは発見されなかった。

遺跡を載せる段丘面は、桂川によって運ばれた礫層面の上に、火山灰等の風成堆積物が約5mほど覆い現在の生活面を作り出している。今回の調査ではもっとも深いところで表土から3mを掘り、堆積土は基本的にI層からIX層に分けられる。その特徴は以下のとおりである。

I層：耕作土、II層：黒色土、III層：黒色土・1mm大の赤色スコリアを含む、IV層：黒褐色土・5mm大の赤色スコリアを含む、V層：暗褐色土+黄褐色土・5mm～10mm大の赤色スコリアを含む、VI層：黄褐色ローム層・10mm大の赤色スコリアを多量に含む、VII層：黄褐色ローム層・10mm大の黒色粒子を含む、IX層：黄赤褐色ローム層・10mm大の黒色粒子、赤色スコリアを含む。



第2図 調査区域図



第3図 遺構配置図及びハード・ルーム面掘下げグリッド

第三章 遺構と遺物

今回の調査で発見された遺構は、縄文時代の住居址1軒、配石遺構1基、集石遺構2基、土壇16基（時期不明を含む）であるがその分布は調査区内に散在的なあり方を示す。住居は調査区中央よりやや西のI・J-10~12グリッドに位置するが、これが単独に存在したか、数軒にまとまって集落をなしていたのかについては本調査では明らかにしえなかった。調査区南は段丘崖が迫っているため、集落が存在したとすれば調査区北側に展開したものと思われる。土壇は、1号住居址に近い配石遺構付近と調査区東側に分布する。また、集石遺構は、1号集石が調査区西端のG~J-1~3グリッドに、2号集石がH-22グリッドに位置している。

第1節 住居址と出土遺物

1号住居址（第4図~16図、図版1・5）

（位置） 調査区中央やや西側I・J-10~12グリッドに位置する。

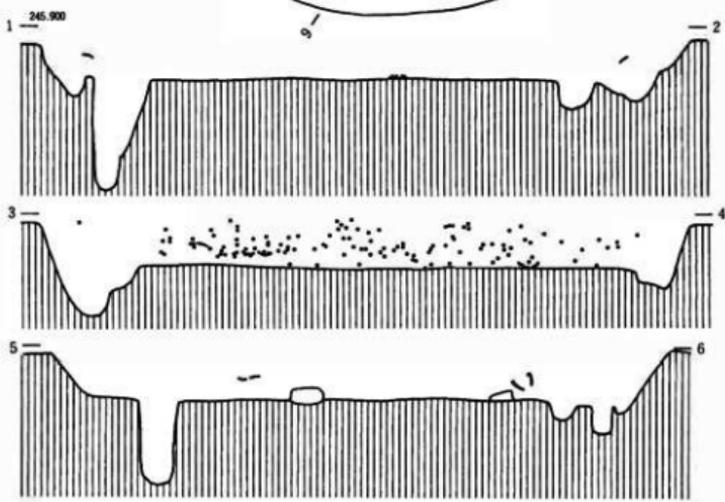
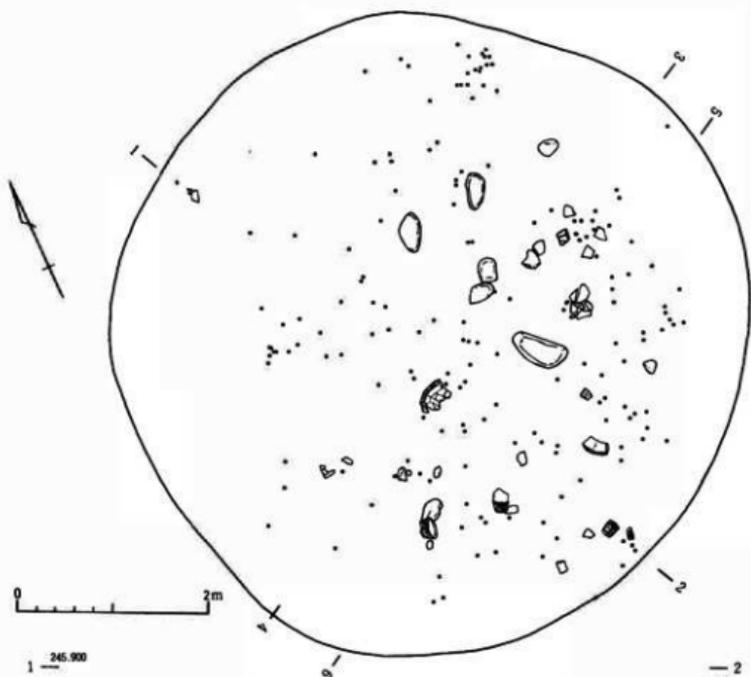
（形状・規模） 東西6m60cm、南北7m10cmの円形に近い形状を呈する。入り口部分の埋竈施設に伴う拡幅を考慮すると当初は直径6m60cm程の円形であったと推定される。

（床面・壁） 床面は堅く踏みしめられており、ほぼ平坦である。壁は住居址外側に向けて斜めに立ち上がり壁高約50cmを測る。壁際には住居址東側の一角を除いて周溝が巡る。

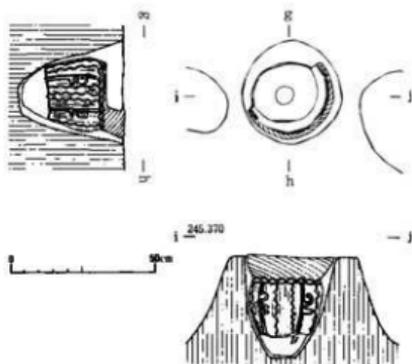
（炉） 住居址中央よりやや奥壁方向に偏して存在する。炉の形態は、石囲埋竈炉であるが、炉石は2つを除いて抜き取られている。炉の掘り方は長軸約1m50cm、短軸1m20cmの楕円形を呈し、深さは最深部では20cmと比較的浅い。炉の掘り方は周縁は炉石を設置するためにテラス状を呈し、厚さ10cm程の扁平な石を配置し石囲炉としている。炉底面に土器片が散在し焼土層が薄く堆積している。

（その他の施設） ビットは大小あわせて8つ確認されている。pit1~5は支柱穴と考えられ、住居址内にはほぼ正五角形をなすように整然と配置されている。ビットは直径40~60cmのほぼ円形を呈し、深さ100cm前後を測る。pit6は、住居址東側の壁に接して存在し、120cm×100cmの平面規模を持つ。断面形態は摺り鉢状を呈し、中央部分が直径50cm程の円形のビットとなる。内容物の検出はないが、壁溝がこのビット付近でできることから住居建設当初から計画的に付設されたものと考えられ、貯蔵穴の可能性もある。pit7・8はいずれも深さ30cm程の円形の小ビットで埋竈を挟みこむように存在している。したがって、埋竈に伴う入り口施設と考えられ階段状の施設が埋竈の上に設けられたものか、埋竈の蓋に関わるものと推定される。

壁溝はビット6の付近で途切れるものの、幅20cm、深さ20cmの溝が壁際を巡り、入り口部分では溝が2重になる。当初は内側の溝が利用されていたものが、埋竈設置に際して入り口部分の拡張が行なわれ、外側の壁溝が使用されるようになったと推定される。

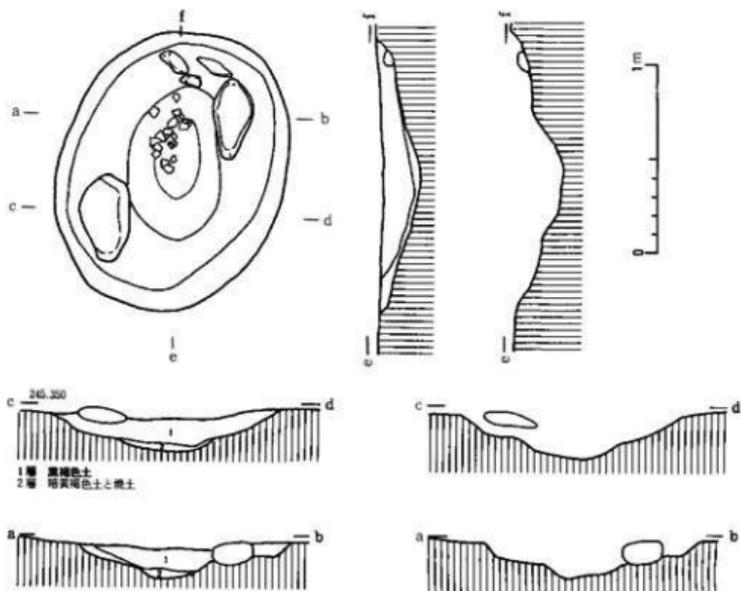


第4图 1号住遺物出土状況

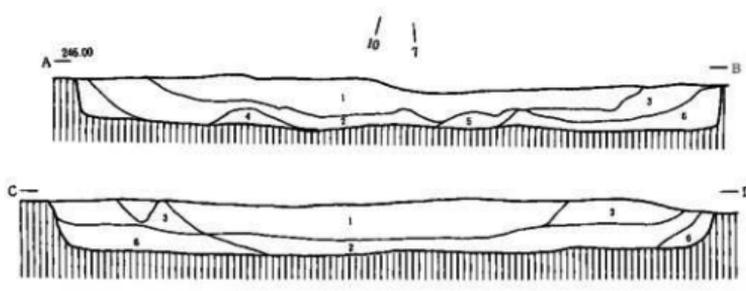
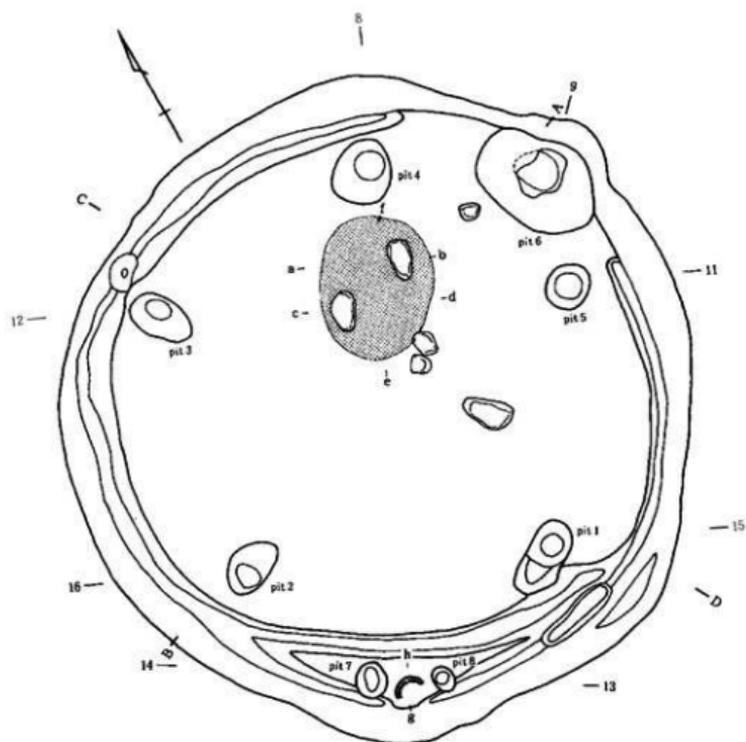


第5図 埋甕出土状況

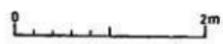
釜居入り口部分は2重の壁溝によって囲まれた島状の部分に埋甕が設置されている。埋甕に使用された埋設土器は口縁部の一部分を欠くもののほぼ完形の土器で、口縁部直径30cm、高さ35cmを測る。埋甕埋設部の掘り方は土器が埋設される最低限の範囲を掘窪め土器を正位に埋設している。土器内からは暗褐色土が充填された状態で出土しているが、骨などの内容物は認められなかった。この埋設土器の説明は（出土遺物）に譲る。



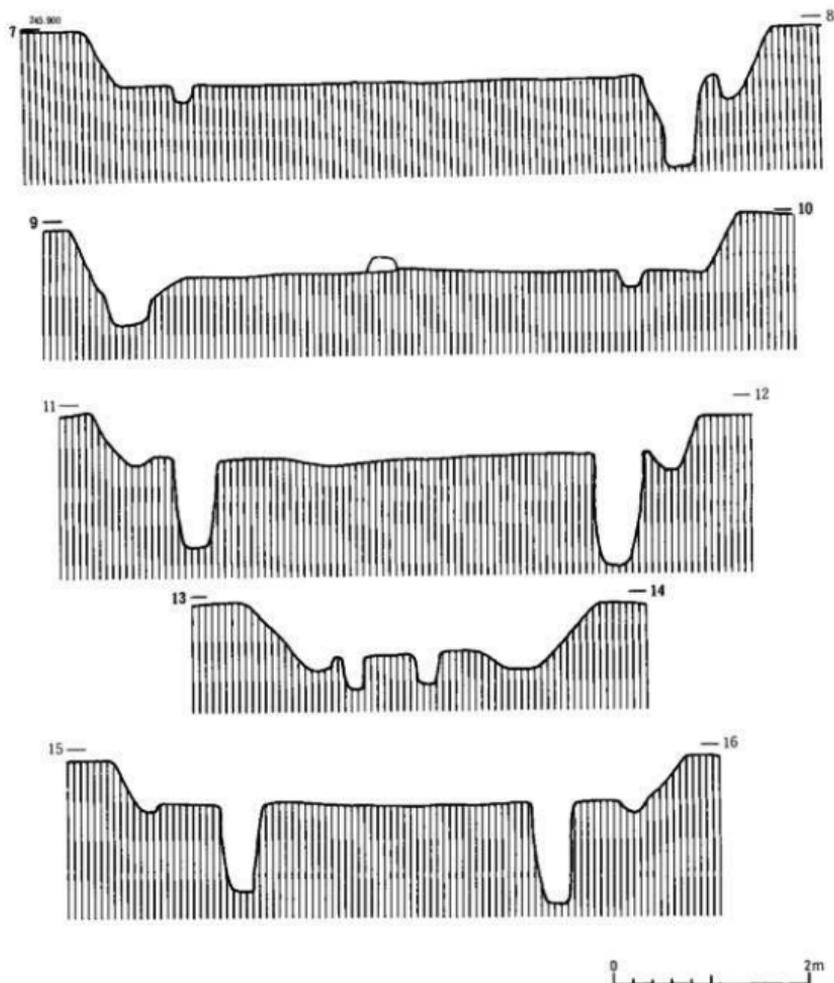
第6図 1号釜炉址



- | | |
|---------|------------|
| 1層 黑褐色土 | 4層 暗褐色土上黄土 |
| 2層 黑褐色土 | 5層 暗灰褐色土 |
| 3層 暗褐色土 | 6層 黑褐色土 |



第7图 1号住居址



第8図 1号住居址エレベーション図

(出土遺物) 1号住居址出土遺物は土器及び石鏃、石錐、打製石斧、磨石、凹石等の石器が出土している(第9図～16図)。遺物の出土状態は壁際に少ない傾向を示し、多くは床面より浮上した状態で検出されている(第4図参照)。

(1)土器(第9図～12図)

1・4. 深鉢形土器口縁部。口縁部が内屈し、口縁部文様を無文帯で残す。口径は1が43cm、4が54cmと推定される大型土器である。 2. 小型の深鉢胴下半部。胴部外面は無文で縦方向

のヘラケズリ痕が認められる。 3. 深鉢胴上部。口縁部がやや内湾し無文帯をなす。頸部に3本の降帯が廻り、胴部には縄文を地紋に沈線の文様を施す。口径17cm、現在高8cmを測る。

5. 深鉢口縁部。口縁部が外反し、頸部付近で屈折する器形を呈する。口縁部文様帯には、撚り糸文を地紋にし、沈線によって2段の連弧文が施される。口径20cm、現在高8cmを測る。 6.

深鉢口縁部。口縁上部が内屈する。口縁部に半截竹管による重弧文を施し、弧と弧の接点に隆帯による懸垂文を付加する。口径45cm、現在高12cmを測る。 7. 深鉢胴上部。口縁部は外反し、縦走る沈線によって区画された縦長の部分を綾杉状の沈線で充填している。口径22cm、

現在高10cmを測る。 8. 深鉢口縁部。口縁部がわずかに内湾しながら外方に開く形態で、胴部中央が緩やかにくびれるものと思われる。器面には縄文が覆い、口縁直下に隆帯による弧状文が廻る。口径25cm、現在高8cmを測る。 9. 深鉢口縁部。口縁部が内屈し、頸部が屈折する形態を示す。口縁部を4つに区画し、半截竹管による重弧文を施す。弧と弧の接点には隆帯

による懸垂文が垂下する。口径20cm、現在高10cmを測る。 10. 深鉢口縁部。口縁上部が内側に折り返され、頸部がくびれる形態を示す。口縁部文様は9と同じく重弧文と懸垂隆帯による

施文を施すが、区画は5単位となっている。頸部の括れには半截竹管による押し引き文、胴部

には横位の平行沈線の上に隆帯を垂下している。口径24cm、現在高16cmを測る。 11. 埋壺に

使用された深鉢形土器。口縁部が内屈し、頸部がくびれ、胴中央部が膨らむ形態を持つ。口縁

部には半截竹管による斜状沈線が覆い、胴部は縦位の条線を地紋とし、その上から隆帯による

懸垂文、渦巻き文を付加する。底部には網代痕が残る。口径32cm、器高35cmを測る。 12. 深

鉢形土器。頸部から口縁部がやや内湾しながら開く。口縁直下の文様帯に縄文と渦巻き隆帯を

施し、その下の第2文様帯を無文で残す。胴部は縄文を地紋とし、隆帯を垂下させる。口径23cm、

器高26cmを測る。 13. 頸部が緩やかに括れる深鉢形土器。縄文を地紋とし、口縁部に沈線による弧文、胴部に沈線による懸垂文が垂下する。底部には木葉痕が認められる。口径23.5cm、器高25cmを測る。

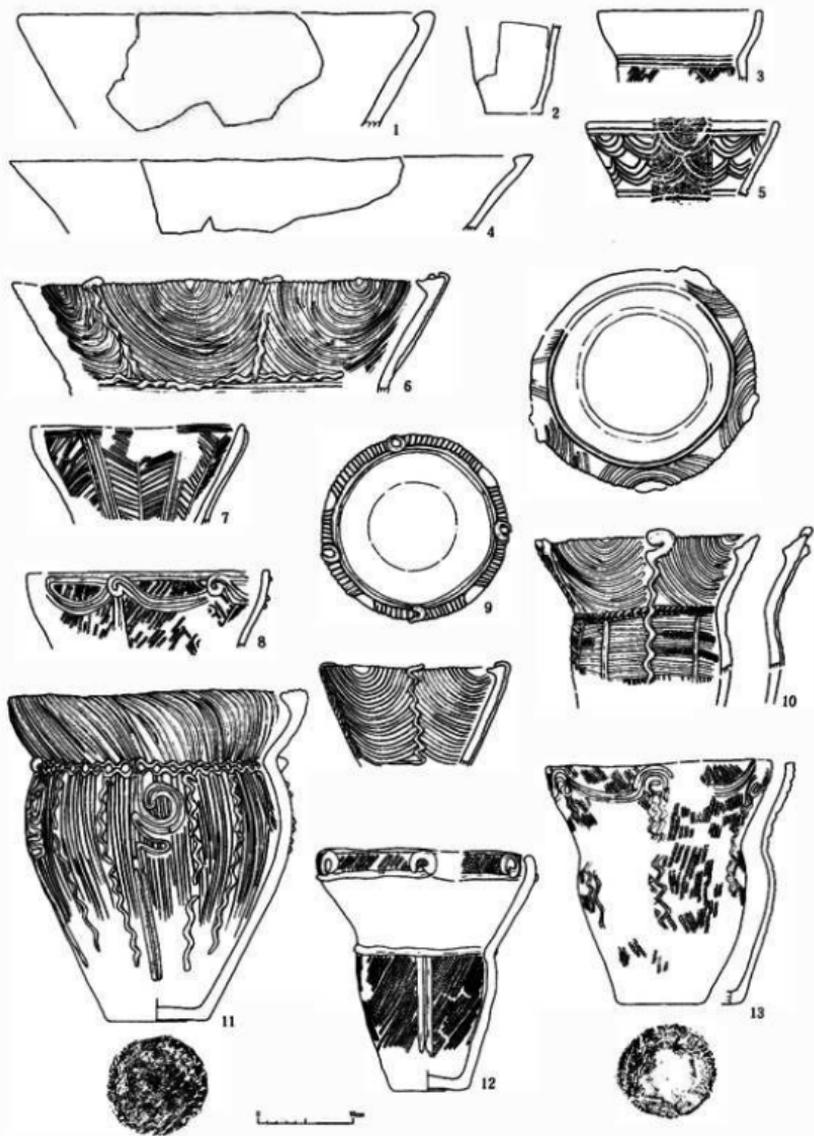
14は口縁部細線文と半截竹管による鋸歯文を特徴とする。15～17は隆帯による区画内を角押し文で施文する土器。18は耳状の把手を持ち、三角形の押し引き文を施す土器。 19・20. 地紋に縄文または条線を持ち、隆帯による渦巻き文を施す浅鉢形土器。口縁下は無文帯を残す。

21. 隆帯による区画内を条線で充填する浅鉢形土器。 22～24. 口縁部が内屈する深鉢土器。半截竹管による重弧文と懸垂隆帯を特徴とする。 25・26. 地紋に条線を施し、懸垂隆帯や半截竹管による渦巻き文を施文した深鉢胴部。 27～30. 同一個体と考えられる深鉢形土器片。

頸部が緩やかに括れ、口縁部がやや内湾しながら開く。器面全体を細かい条線が覆い、沈線による弧状文、渦巻き文を施す。 31・32・35～39. 口縁部の沈線による弧状文を特徴とする土器で、地紋に縄文、撚り糸文を残す。 33・34. 口縁部の隆帯による弧状文を特徴とする土器。

弧状区画内に縄文、列点文を持つ。 40・41・44. 縄文を地紋とし、沈線による懸垂文を施す。

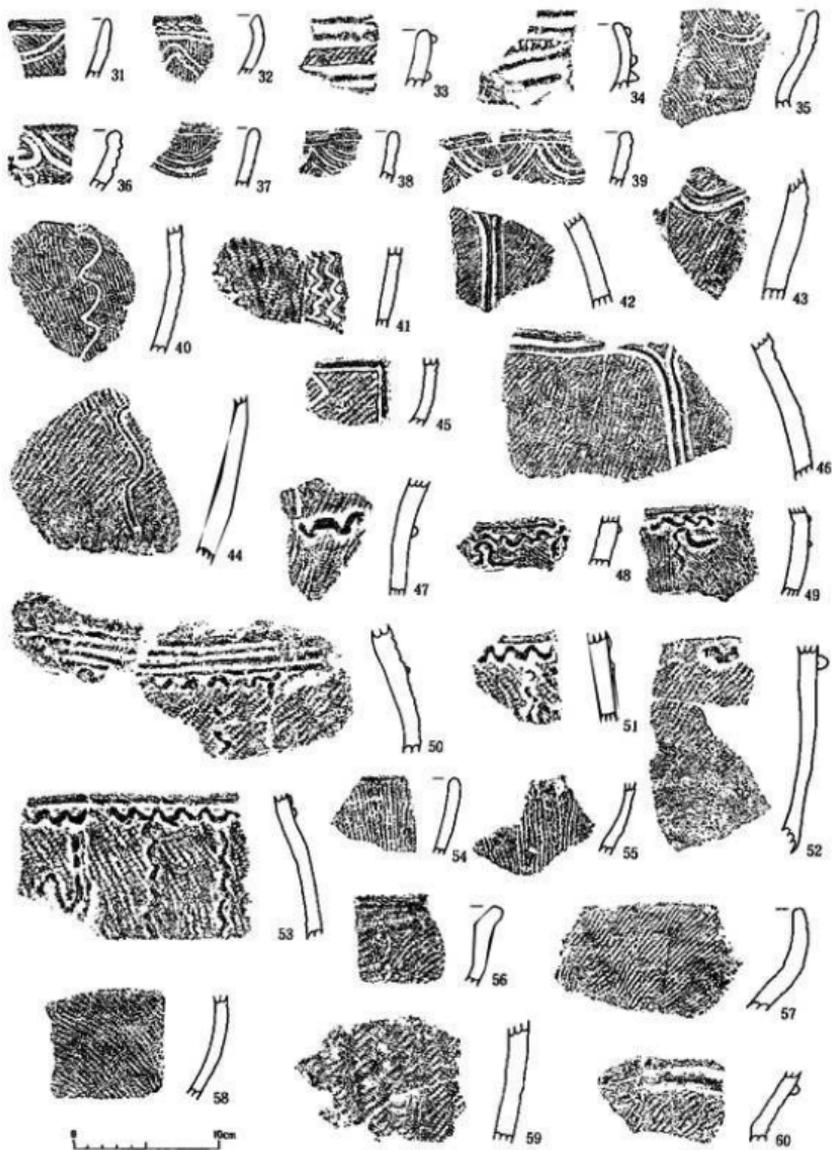
45・46. 縄文を地紋とし、半截竹管による区画帯を施す。 47～53. 縄文を地紋とし、隆帯による懸垂文を施す深鉢土器片。 54・55. 地紋に撚り糸文を施す。 56～60. 縄文を地紋とした土器片。 61. 縄文を施す把手。 62. 釣り手形土器破片。 63. 網代丘痕をもつ土器



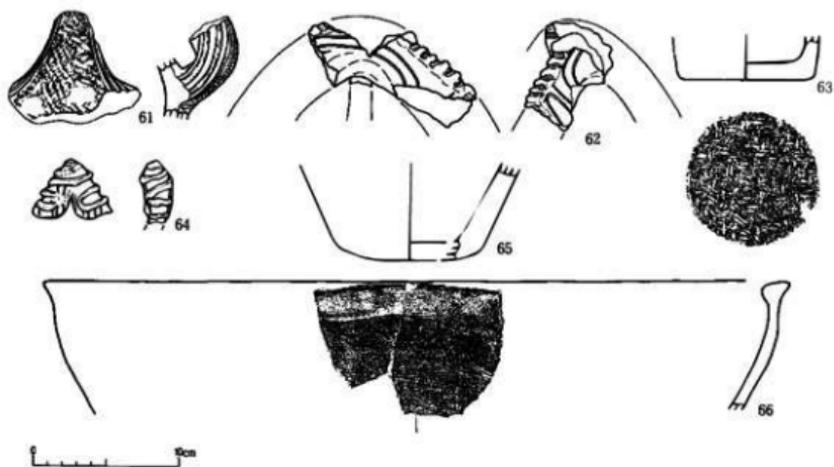
第9图 1号住居址出土土器(1)



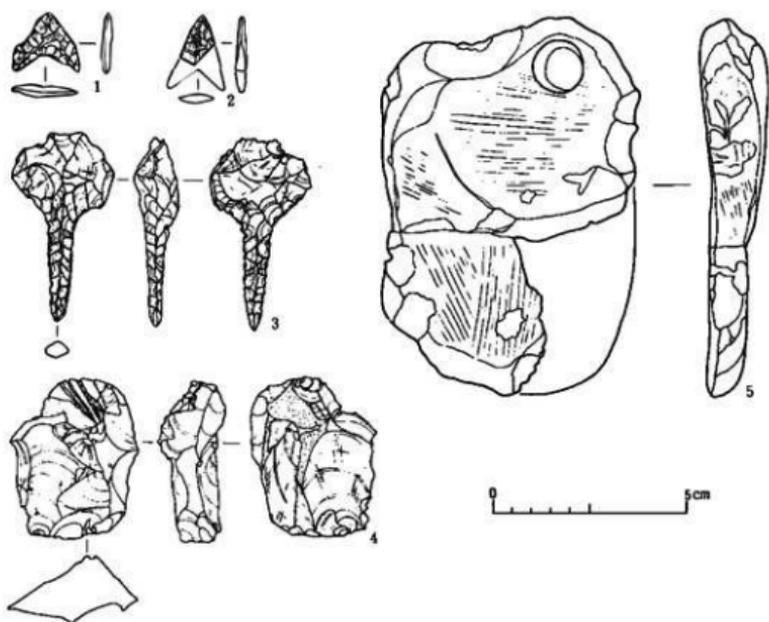
第10图 1号住居址出土土器(2)



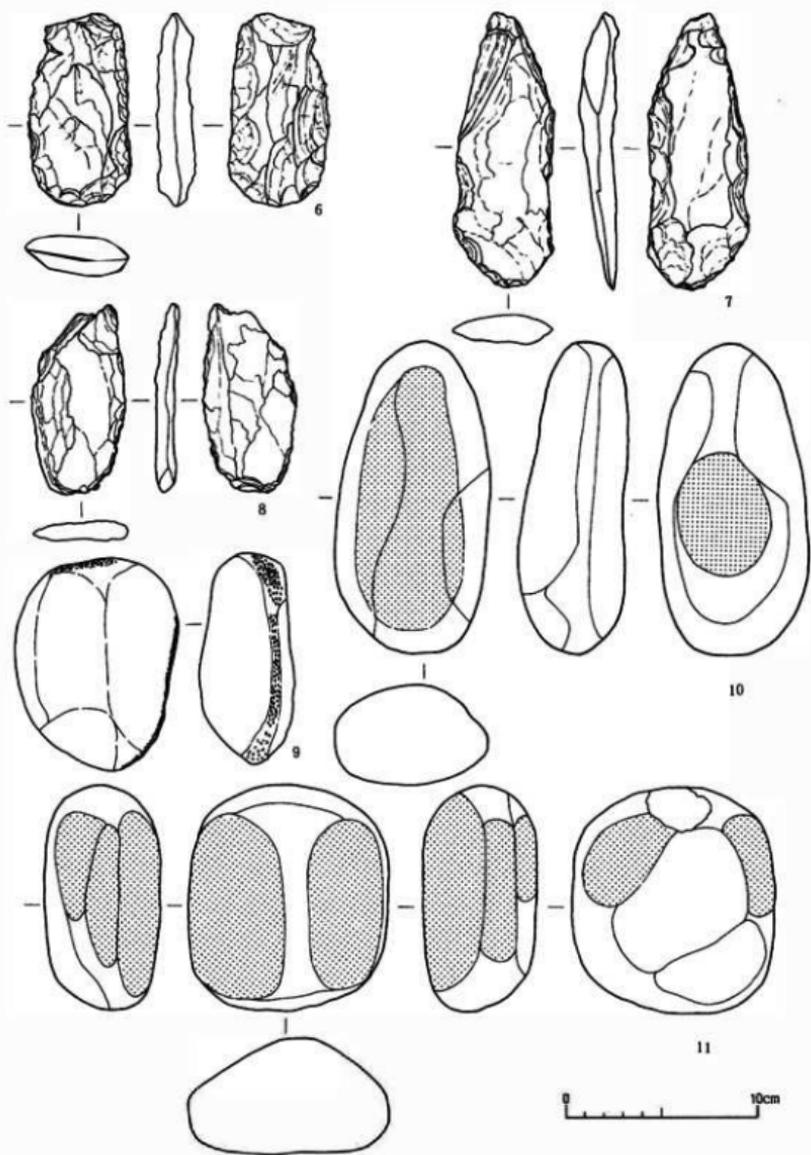
第11图 1号住居址出土土器(3)



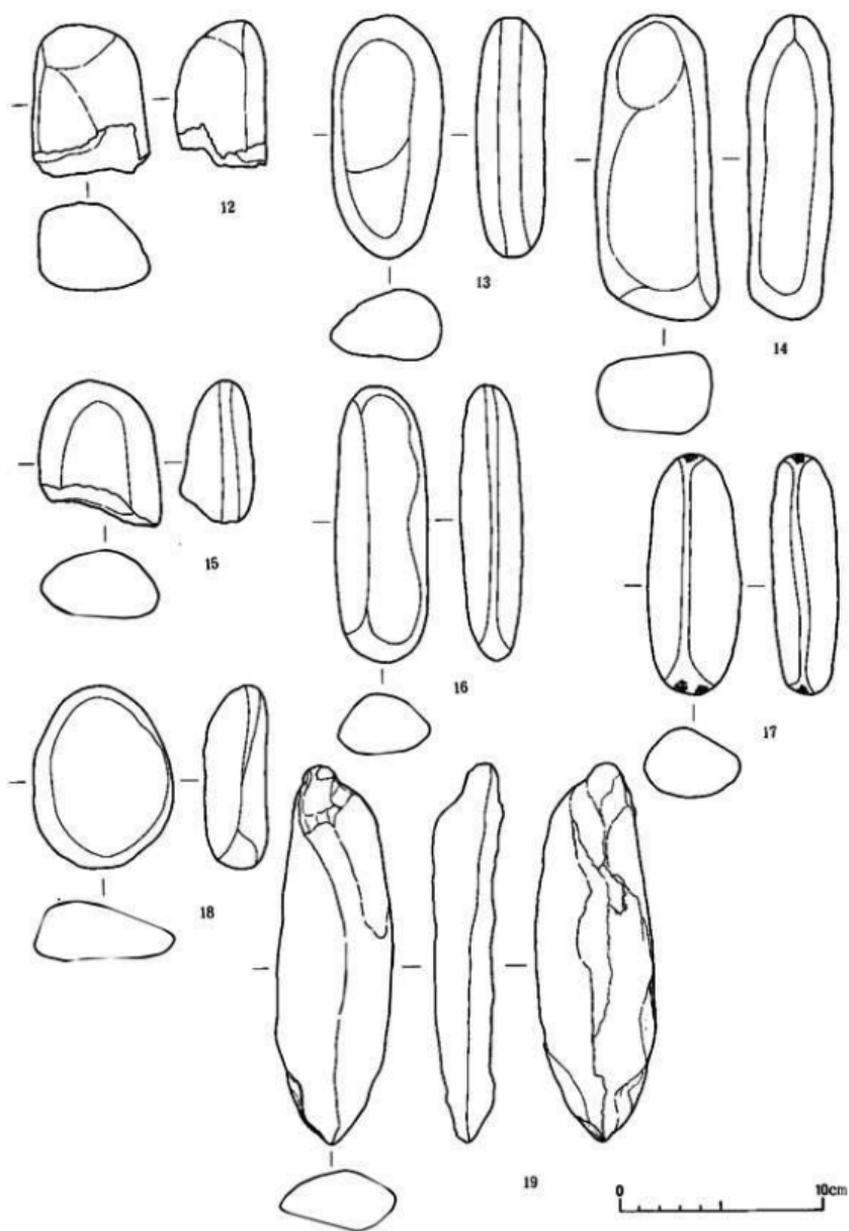
第12图 1号住居址出土土器(4)



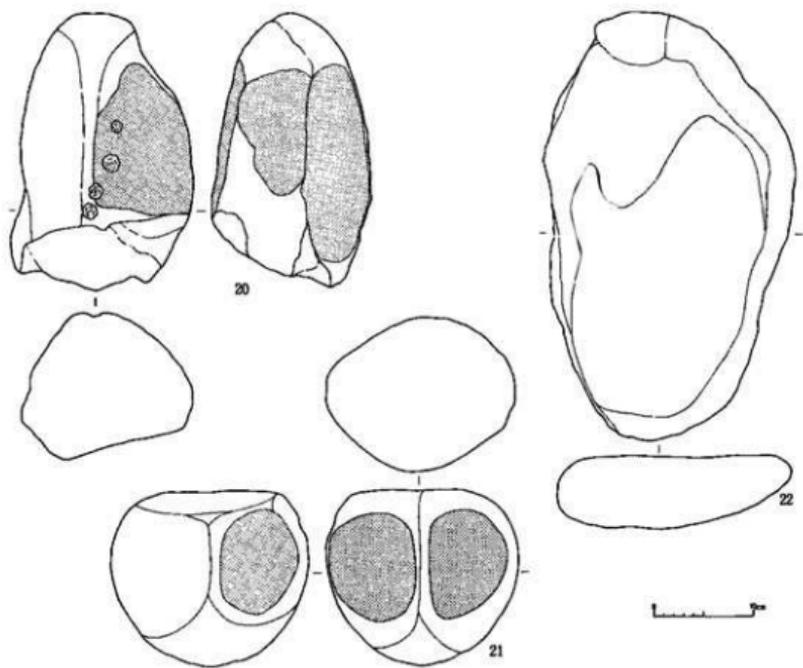
第13图 1号住居址出土石器(1)



第14图 1号住居址出土石器(2)



第15图 1号住居址出土石器(3)



第16図 1号竈居址出土石器(4)

底部破片。66. 内湾口縁をもつ浅鉢形土器。ヘラミガキによる器面調整痕を残す。

以上の土器のうち14は縄文時代中期初頭の五領ケ台式、15～17は中期前葉の貉沢式、18は藤内式、その他については中期後葉の曾利Ⅱ式及びそれに並行する時期の土器群に比定される。竈居址の使用時期は埋甕から曾利Ⅱ式期と考えられる。

(2)石器(第13～16図)

本住居址から出土した石器は、石鏃2点(1・2)、石錐1点(3)、浮子状石製品1点(5)、打製石斧3点(6～8)、磨石3点(10・11・21)、多孔石1点(20)、石皿状石器1点(22)である。9・12～19については長さ10～20cmの楕円形の石製品であるが、使用痕が認められない。形状、重量からムシロ状の編み物を編む際に使用された錘とも推定されるが、確証はない。その他、黒曜石剥片10点と玄武岩製溶岩2点が検出されている。これらの石製品に関わる内容は、石器一覧表に示す。

第2節 土壌（第17図～20図）

1号土壌（第17図） H-14・15グリッドに位置する。長軸2m、短軸1mの長方形を呈し、深さ30cmを測る。土壌底部は平坦で、壁はやや斜めに立ち上がる。出土遺物は、半截竹管による平行沈線の特徴とする縄文土器1点（第23図10）が存在する。

2号土壌（第17図） G-14グリッドに位置する。土壌東側はすでに削平されているが、長軸約2m50cm、短軸1m75cmの隅丸長方形を呈すると考えられる。土壌北側がテラス状になり、最深部が約30cmを測る。出土遺物は存在しない。

3号土壌（第17図） G-13グリッドに位置する。長軸1m85cm、短軸85cmの長方形を呈し、深さ20cmを測る。壁はほぼ直壁で、土壌底部は平坦をなす。出土遺物なし。

4号土壌（第17図） G-13グリッド、3号土壌の西側に位置する。長軸2m10cm、短軸1mの長方形を呈し、深さ40cmを測る。壁は直壁で、底部は平坦をなす。出土遺物なし。

5号土壌（第18図） I-23グリッドに位置する。長軸1m80cm、短軸1m5cmの長方形を呈し、深さ40cmを測る。壁はほぼ直壁で底部は平坦である。出土遺物なし。

6号土壌（第18図） G-24グリッドに位置する。長軸2m、短軸95cmの不整楕円形を呈する。壁は東側が緩やかに立ち上がるが、他は直壁で、底部は平坦をなす。出土遺物なし。

7号土壌（第18図） H-24グリッドに位置する。直径約1mの円形を呈し、深さ10cmを測る。出土遺物なし。

8号土壌（第18図） J-24グリッドに位置し、9号土壌と重複する。長軸1m60cm、短軸1mの長方形を呈し、深さ30cmを測る。壁は斜めに立ち上がり、底部は平坦となる。出土遺物なし。

9号土壌（第18図） J-24グリッドに位置し、8号土壌と重複する。長軸1m35cm、短軸1mの長方形を呈し、深さ20cmを測る。出土遺物なし。

10号土壌（第18図） E-28グリッドに位置する。長軸75cm、短軸60cmの楕円形を呈する。深さ30cmを測り、南側にテラスを持つ。出土遺物なし。

11号土壌（第19図） F-29・30グリッドに位置する。直径1mの円形を呈し、深さ50cmを測る。壁は直壁で、底部は平坦である。

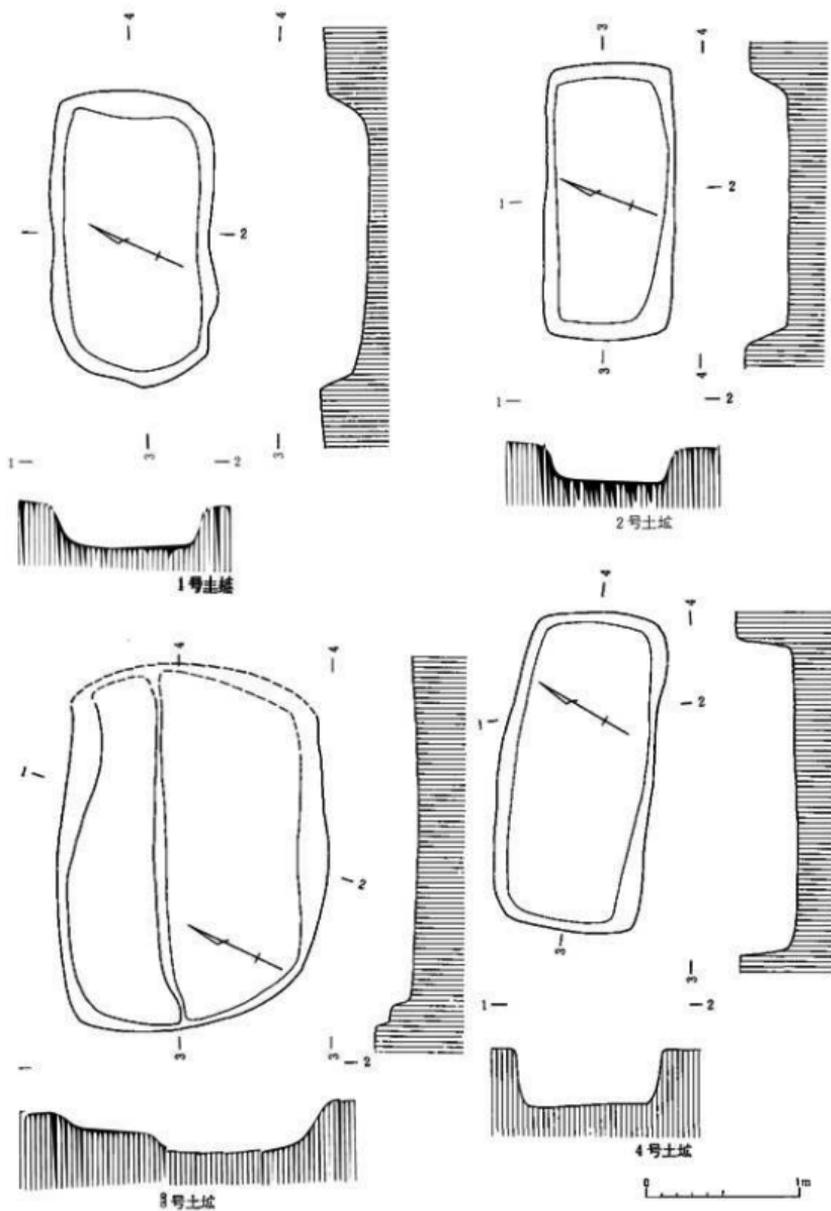
12号土壌（第19図） L-32グリッドに位置する。長軸1m80cm、短軸70cmの長方形を呈し、深さ20cmを測る。出土遺物なし。

13号土壌（第19図） D-31グリッドに位置する。長軸1m20cm、短軸1mの不整形を呈し、深さ40cmを測る。土壌上面に焼土を含む。

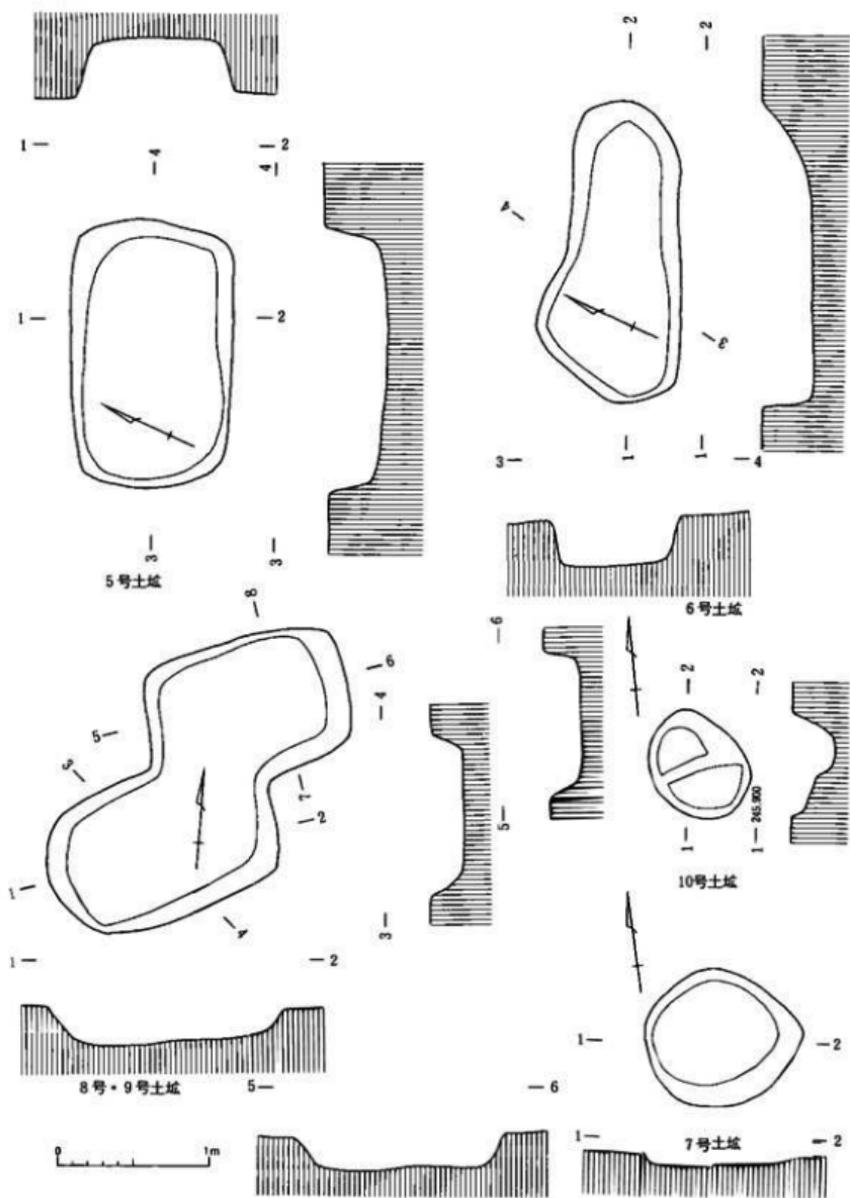
14号土壌（第19図） F-21グリッドに位置する。2m50cm×2m20cmの不整形を呈する。土壌底面はほぼ平坦で、一角にピットを持つ。出土遺物なし。

15号土壌（第19・20図） 1号配石遺構の東G-13グリッドに位置する。長軸1m20cm、短軸70cmの楕円形を呈し、深さ30cmを測る。土壌内部に焼土層が検出されている。

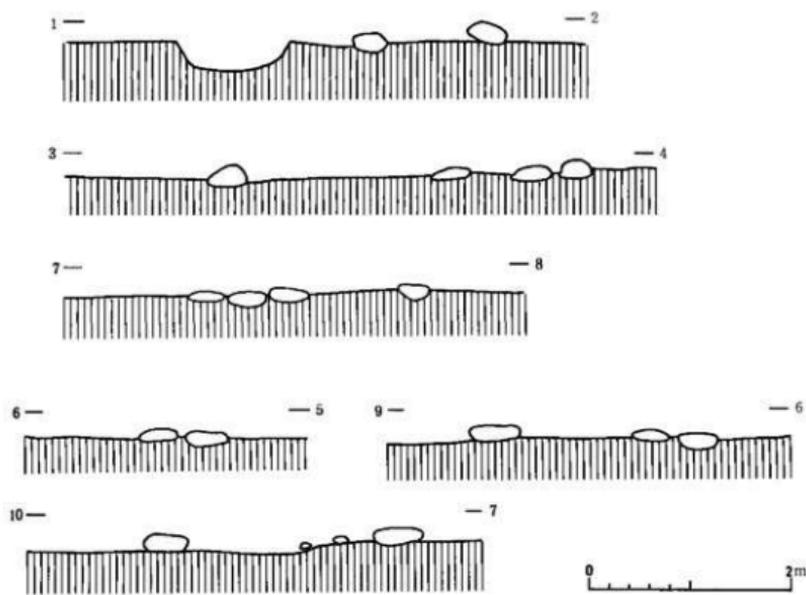
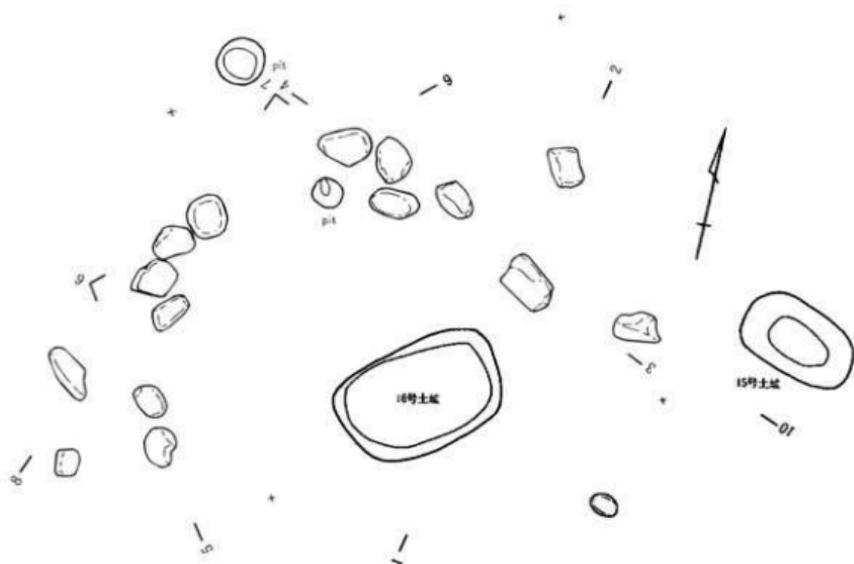
16号土壌（第20図） 1号配石遺構西、H-12グリッドに位置する。長軸1m80cm、短軸1mの長方形を呈し、深さ30cmを測る。出土遺物なし。



第17图 土坑 (1)



第18图 土城 (2)



第20图 配石遺構

第3節 配石遺構

1号配石遺構（第20図）

（位置） 1号住居址南側のG・H-12グリッドに位置する。

（形状・規模） 直径約4m50cmの範囲を半環状に配石が巡る。配石に使用された石は、30cm～50cm程の人頭大の扁平な自然礫である。

（伴出遺構） 配石に直接関わる下部の遺構は存在しないが、この遺構に近接した15号・16号土壌が関連遺構の可能性があろう。

（出土遺物） 遺構周辺部より縄文土器、打製石斧（第25図）、磨石（第27図1）などが出土している。出土土器は、縄文中期後葉の曾利Ⅱ式土器（第23図27・29・32・35・42）であることから該期の配石遺構である可能性が高い。



第21図 1号集石

第4節 集石遺構

1号集石遺構（第21図）

（位置） G～J-1～3グリッドに位置する。

（形状・規模） 直径10m程の範囲に拳大の礫が集中する。礫はほとんど焼成を受けているため赤変しているものや脆く割れるものが多い。

（伴出遺構） 本遺構に伴う下部遺構は全く検出されなかった。したがって、一度別の場所で焼成を受け使用された焼け礫が廃棄されたものとも推定される。

（出土遺物） 集石部分より縄文土器（第23図1～4）や磨石（第26図5・6）が出土している。出土土器は貝殻腹縁による圧痕を施すもので、口唇部に刻みを巡らす。これらの土器は縄文時代早期の田戸上層式土器に対比される。集石の存在する層は、基本土層のIV層下層面にあたり、縄文時代中期の遺構面より確実に下に存在する事などから、伴出遺物の時期を集石の存在時期と捉えておきたい。

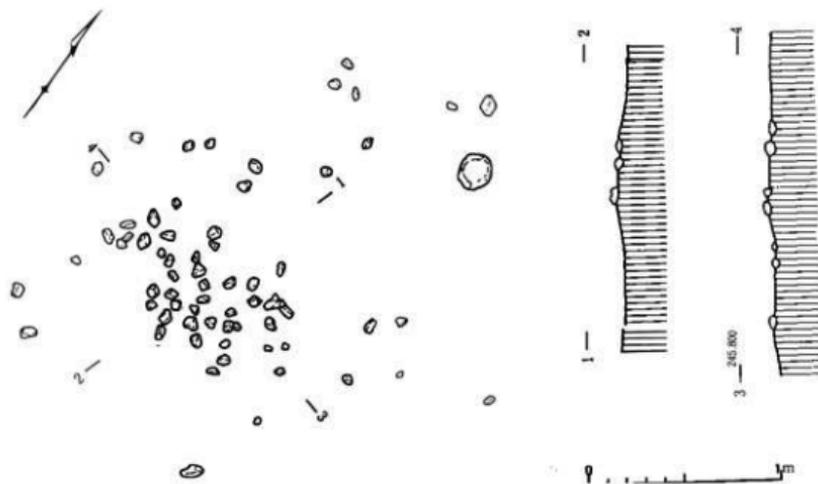
2号集石遺構（第22図）

（位置） H-22グリッドに位置する。

（形状・規模） 直径1m 50cm程の範囲に拳大の礫が集中する。

（伴出遺構） 集石の下部遺構等は存在しない。

（出土遺物） なし。



第22図 2号集石

第5節 グリッド及び住居址以外の出土遺物

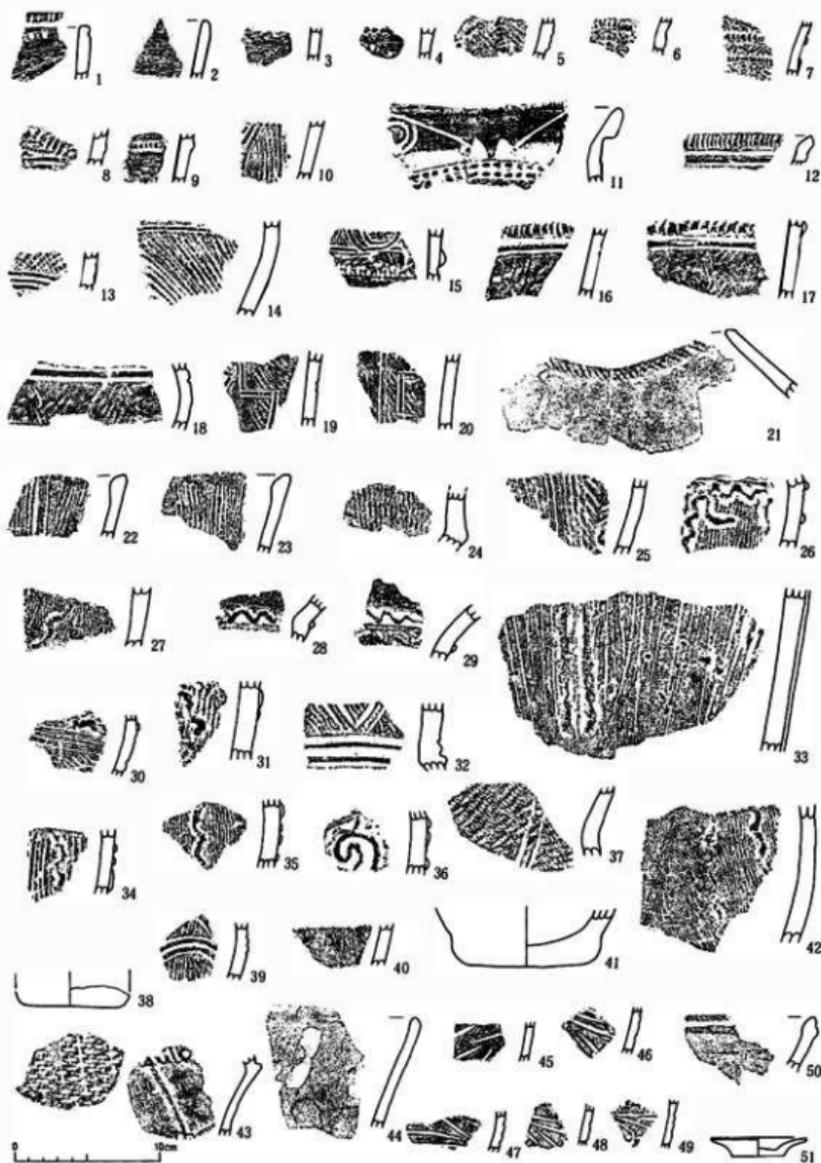
(1) 土器 (第23図)

本遺跡から出土した土器は、縄文時代早期から晩期に至る各期のものと、近世の陶器が存在する。

1～4. 1号集石内。外面に斜状沈線と貝殻腹縁文が施され、口唇部に刻みを巡らす。縄文時代早期田戸上層式。 5～9. 結節浮線文を特徴とする土器群。地紋に縄文を持つものと無文のものがある。 10. 半載竹管による集合沈線文土器。 11. 口縁部が肥厚、そこに渦巻き沈線文や三角形の陰刻文、頸部に半載竹管の押し引き文を施す。5～11は縄文時代前期十三善提式に比定される土器群である。 12. 口縁部に爪形押し引き文を巡らす。13・14. へらによる集合沈線文土器。 15. 半載竹管による弧状文、地紋に縄文を施す。頸部には列点文が巡り、橋状把手と考えられる突起を持つ。 16～18. 頸部に爪形押し引き文と平行沈線をめぐらし、胴部に結節縄文を施す土器群。 19・20. 縄文を地紋とし、半載竹管による直線的な文様を施す。以上、12～20は中期初頭の五領ケ台式に対比される。 21. 口縁部が内屈した形態を持つ深鉢形土器。口唇部に縄文を施す。中期中葉の藤内式に対比される。 22・23. 口縁内側がわずかに肥厚する深鉢口縁部。地紋に無節の縄文を転がす。 24. 屈折底部を持つ深鉢で、地紋に縄文を持つ。 22～24は中期中葉の井戸尻式に比定される。 25. へら状工具による条線と稜杉文を特徴とする。26～31・33～36・42. 降帯による懸垂文を特徴とする1群で、地紋に条線や撚り糸文を施している。 32・37. 縄文を地紋に、平行沈線文をその上から施文する土器。 39. 条線を地紋に、半載竹管による曲線的な文様が施される。 40. ハの字状の沈線を施す土器。以上の25～42の土器は、いずれも中期後葉の曾利式に対比される。 43. 屈折口縁を持つ深鉢で、口縁上部に沈線、円文、下部に刻みを持つ細い隆帯が垂下する。後期前葉堀の内式に比定される。 45～49. 横位の稜杉状沈線、渦巻き文を施す土器。晩期前葉の清水天王山式に対比される。 50. 口縁部の平行沈線を特徴とし、晩期末の水1式に比定される。 51. 外反口縁を持つ灰釉陶器。底部は糸切痕をそのまま残す。用途は、灯明皿と考えられる。

土器出土地点は次のとおりである。

1～4. 1号集石。 5. E-3Gr. 6. F-13Gr. 7. F-14Gr. 10. 1土。
11. A-5Gr. 12. H-19Gr. 14. J-3Gr. 16～18. H-19Gr. 21. H-3Gr.
22・23. J-27Gr. 24. J-1Gr. 25. J-12Gr. 27・35・42. H-13Gr.
34. D-29Gr. 36. I-18Gr. 38. A-4Gr. 40. I-3Gr. 43. H-24Gr.
50. E-29Gr. その他は表土中出土である。



第23図 出土土器

(2) 石器 (第24図から27図)

① 石鏃 (第24図)

住居址以外から出土した石鏃は8点で、内3点は欠損点である。石材は4がチャート、それ以外は黒曜石を使用している。いずれも凹基無茎石鏃であるが、1・2・3・8は基部の挟りの小さい三角鏃にも類似する。4・6は基部の挟りが深く、U字状を呈する。側面の形態が直線的なものやや膨らみを持つタイプが存在する。大きさは完形で1.5cm～2.0cm、重量は0.6gで比較的均一である。

② 打製石斧 (第25図～26図)

本遺跡からは扁平な粘板岩片が遺物包含層中から相当数出土しているが、石器製品は図化した11点のみである。形態は短冊形 (第25図1～7・第26図3・4) と分銅形 (第26図1・2) の2形態が存在する。

出土量の多い短冊形石斧のなかでも刃部の形態が斜刃となるものと円刃となるものに細分されるが、直刃のものは存在しない。刃部形態の違いは石斧が実際に使用された方向や用途によって異なるものと考えられるが、量的には円刃をなすものが主体を占める。刃部幅は最大で10cmの大型のものもあるが、5～6cmのものが多い。石器の欠損は、柄の装着が行なわれる基部が圧倒的に多い。

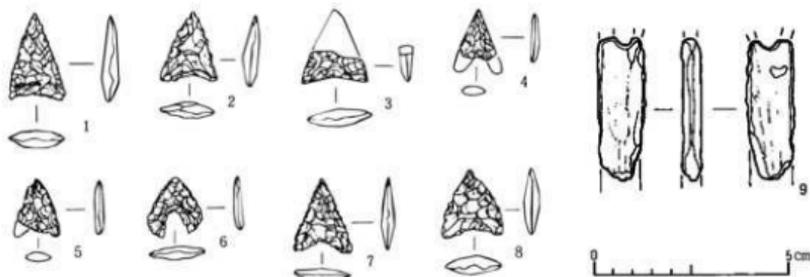
分銅形の石斧は2点で、いずれも完形品である。短冊形に比べ刃部が鈍く、重量も重い。刃部形態には、短冊形同様に斜刃と円刃がある。

③ 磨石・凹石 (第26図・27図)

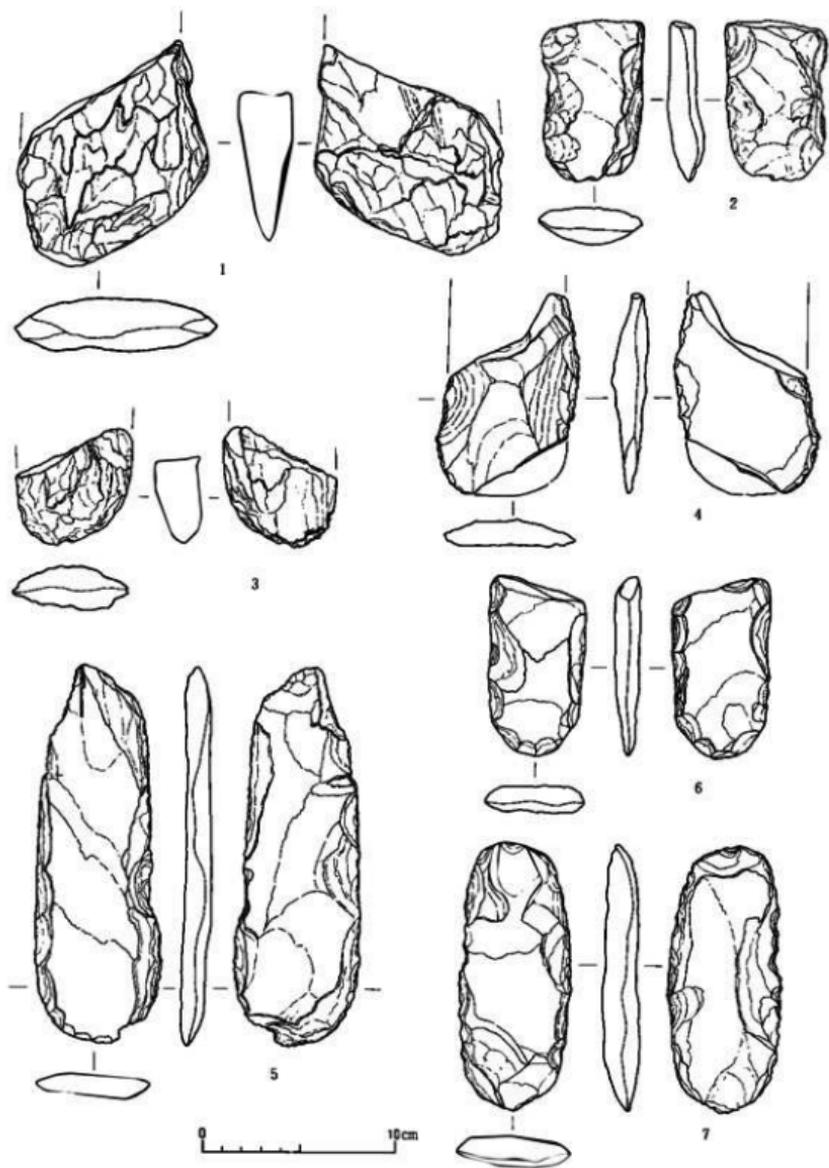
出土した磨石は5点、凹石は2点である。

磨石は平面形が楕円形のものほとんどで、断面形態は扁平な楕円形をもつ。大きさは長軸10～15cmの拳大のものが目立つ。磨り面は表裏2面と側面を加えた4面のものがある他、全体が磨耗して使用面を限定できないものも存在する。

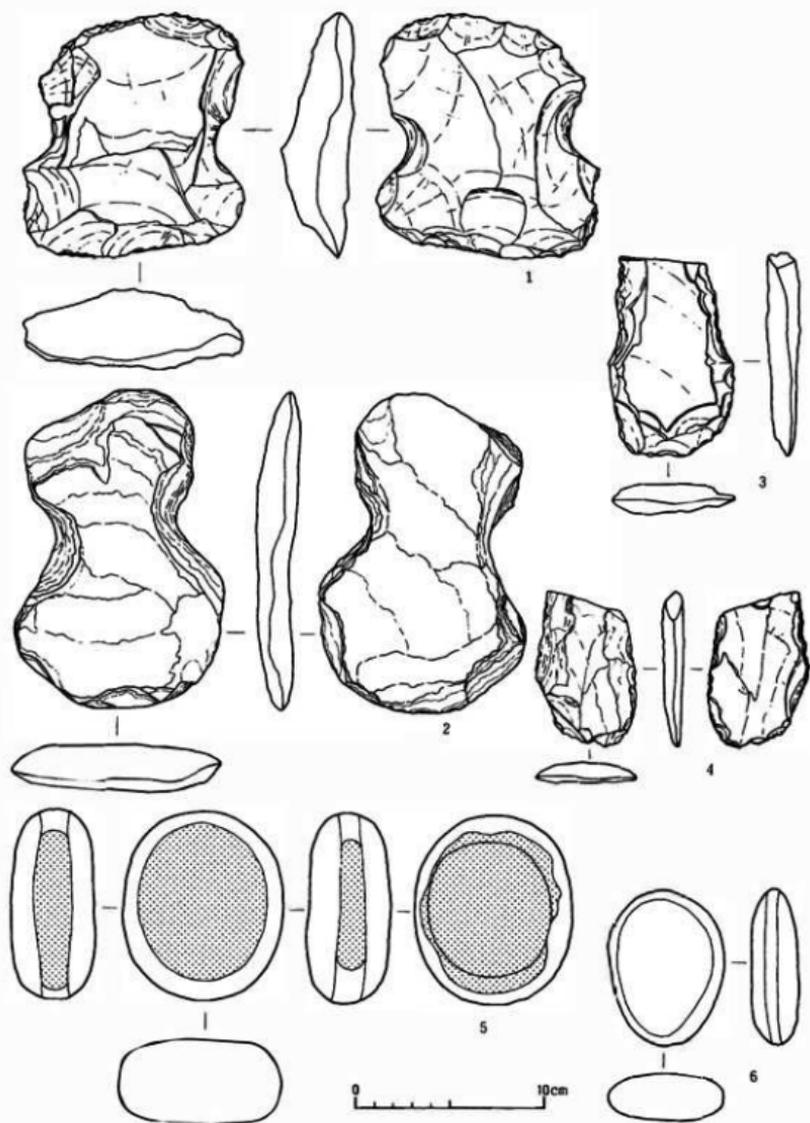
凹石は形態的には磨石に類似するが、とくに磨り面を持つものはなく、片面のみに凹みを持つタイプである。端部の打撃痕は認められない。



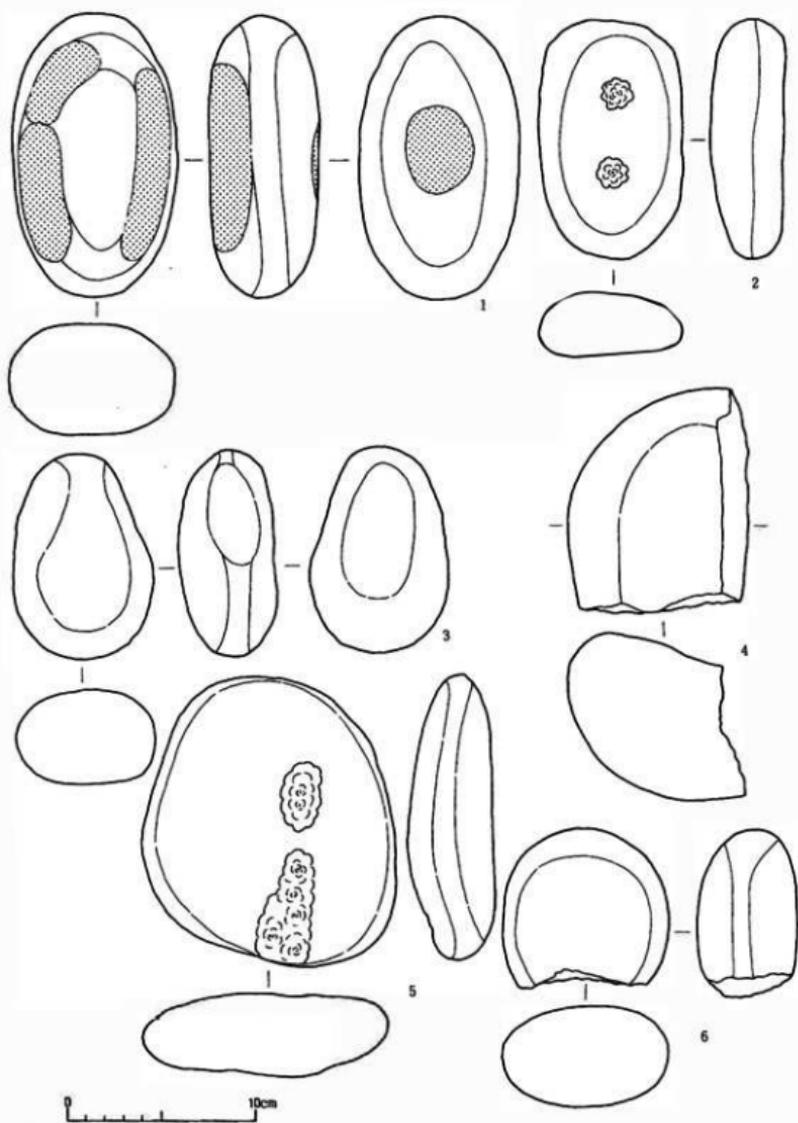
第24図 石鏃及び骨製品



第25图 打製石斧



第26図 打製石斧及び磨石



第27図 磨石及び凹石

表1 石鏃一覧

図番号	出土位置	長さcm	幅 cm	重量 g	形 態	石 材
13-1	1号住	1.5	1.8	0.47	凹基無茎	黒曜石
13-2	1号住	1.3	1.0	0.2	凹基無茎	黒曜石
24-1	K-27Gr	2.2	1.5	1.1	凹基無茎	黒曜石
24-2	表土	1.8	1.5	0.7	凹基無茎	黒曜石
24-3	I-16Gr	0.9	1.7	0.6	凹基無茎	黒曜石
24-4	I-14Gr	1.2	1.0	0.2	凹基無茎	チャート
24-5	I-20Gr	1.5	1.2	0.3	凹基無茎	黒曜石
24-6	H-19Gr	1.5	1.4	0.3	凹基無茎	黒曜石
24-7	H-11Gr	2.0	1.5	0.4	凹基無茎	黒曜石
24-8	表土	1.7	1.6	0.8	凹基無茎	黒曜石

表2 打製石斧一覧

図番号	出土位置	長さcm	幅 cm	厚さcm	重量 g	形 態	石 材
14-6	1号住	10.3	5.2	2.0	120	短冊形	粗粒砂岩
14-7	1号住	4.5	6.9	2.4	70	短冊形	粘板岩(ホルンフェルス化)
14-8	1号住	10.0	4.8	1.0	70	短冊形	粘板岩(ホルンフェルス化)
25-1	1号配石	7.6	11.6	2.8	320	短冊形	粘板岩(ホルンフェルス化)
25-2	A-5Gr	8.2	5.2	1.9	90	短冊形	ホルンフェルス
25-3	1号配石	4.5	6.9	2.4	70	短冊形	粘板岩(ホルンフェルス化)
25-4	1号配石	10.3	7.4	1.3	100	短冊形	粘板岩(ホルンフェルス化)
25-5	K-4Gr	19.5	6.5	1.3	200	短冊形	粘板岩
25-6	I-5Gr	9.2	4.9	1.4	80	短冊形	ホルンフェルス
25-7	E-15Gr	13.7	5.7	1.7	200	短冊形	ホルンフェルス
26-1	表土	13.0	11.6	4.4	540	分銅形	ホルンフェルス
26-2	表土	16.9	11.0	2.6	460	分銅形	ホルンフェルス
26-3	表土	8.3	5.1	1.1	50	分銅形	ホルンフェルス

表3 磨石・凹石・石皿・その他

図番号	出土位置	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	器種	石 材
14-9	1号住	11.3	8.5	4.9	630	その他	安山岩質凝灰岩
14-10	1号住	16.6	7.8	5.4	1020	磨石	細礫岩
14-11	1号住	12.0	10.5	6.2	1090	磨石	花崗岩類
15-12	1号住	7.4	5.8	4.2	240	その他	礫岩
15-13	1号住	11.8	5.5	3.5	390	その他	玄武岩
15-14	1号住	14.9	6.0	4.1	640	その他	玄武岩
15-15	1号住	7.0	5.9	3.4	180	その他	凝灰岩
15-16	1号住	13.4	4.5	3.0	280	その他	凝灰岩
15-17	1号住	11.7	4.7	3.5	260	その他	花崗岩類
15-18	1号住	8.9	6.9	3.0	260	その他	中粒砂岩
15-19	1号住	18.6	5.8	3.0	400	その他	砂質粘板岩
16-20	1号住	27.8	18.4	14.9	8200	多孔石	粗粒砂岩
16-21	1号住	17.8	19.4	15.7	8000	磨石	花崗岩類
16-22	1号住	43.5	25.2	7.5	12400	石皿	花崗岩類
26-5	J-1Gr	10.1	8.4	4.5	600	磨石	花崗岩類
26-6	H-3Gr	8.3	6.0	2.5	190	磨石	粗粒砂岩
27-1	1号配石	15.0	8.8	5.9	1200	磨石	中粒砂岩
27-2	表土	12.8	7.6	3.5	590	凹石	凝灰岩
27-3	J-12Gr	11.0	7.5	5.0	610	磨石	凝灰角レキ岩
27-4	表土	12.1	9.6	9.0	1470	石皿	花崗岩類
27-5	J-1Gr	15.6	13.6	4.6	1270	凹石	玄武岩
27-6	表土	8.6	8.9	5.4	620	磨石	凝灰岩

④ 石皿(第27図4) 小型の石皿が1点出土している。残存部は全体の4分の1ほどで、表面に凹部を持つ。石材は花崗岩質のものを使用している。

(3) 骨製品(第24図4)

幅1cm程の扁平な形態で、欠損が激しい。端部は欠損するが、残存部から2又に分離しているものと推定される。現在長3.5cm、幅1cm、厚さ0.5cmを測る。

第IV章 ま と め

本遺跡発掘調査以前の段階では、縄文時代と平安時代の遺構が予測されていたが、今回の調査では後者は全く発見されず遺構、遺物共に縄文時代のもを主体としている。発見された遺構はすでに詳しく述べてきたとおり住居址1軒、配石遺構1基、集石遺構2基、土壌16基であるが、土壌については確実な時期決定の可能な資料は少ない。出土した遺物は縄文時代早期から晩期に至る各時期のものが存在し、付近に長時間にわたる断続的な集落等が営まれていた可能性が高い。調査区内の遺構の分布は非常に散在的で、集落の中でもきわめて周縁的なあり方を示している。

唯一の住居址である1号住は、縄文時代中期の曾利Ⅱ式期の竪穴で、重複もなく残存状況は極めて良好であった。住居址内の内部構造は、5本の主柱穴、石囲い炉、貯蔵穴、埋甕と入り口部施設によって構成され、壁際には周溝が巡る。本住居で最も特徴的なことは、当初ほぼ円形プランに作られた住居が埋甕の設置に伴って入り口部分が拡張され、その部分の壁溝が外側に変更されていることである。入り口拡張時に階段状の施設も設置されたと推定されるが、これは埋甕の蓋としての機能を同時に兼ね備えていたものかもしれない。主柱の立て替えが認められないことから、この拡張は入り口部のみの改築と考えられる。ところで、甲府盆地内の該期の住居址では、石囲い炉の形態は扁平な大型の石を深く突きたてた四角形に組合せたものが多く見られるが、本住居では炉の掘り方テラス部分に石を置くだけで構築されている。同町内大倉遺跡の中期末葉の住居址からは石を立てて組む前者のタイプの石囲い炉が確認されることから、この炉形態がやや盆地内より遅れて伝播した可能性もあるが現段階では住居址の発掘例が少なく早急に結論づける事はできない。

住居址内出土遺物は、深鉢、浅鉢、釣り手形土器等の豊富な内容を示している。その主体は同時期の中部山岳地方の曾利式土器群であり、その中に南関東地方の加曾利E式土器に伴出する連弧文を特徴とする土器が客体的に存在している状況が理解できる。遺跡の存在する地域は、中部地方と関東地方の接点に位置し、当時は曾利式文化圏と加曾利E式文化圏が互いに接する地域であったと考えられ、土器の交流の背景に当時の人的な動態を窺うことができるであろう。

1号住居址南側に存在する配石遺構は、周辺の出土土器からはほぼ住居と同時期の遺構と考えられる。遺構東側に近接する15号土壌からは焼土が確認されており、配石に関連した祭祀行為の痕跡とも考え得る。

集石は、2号集石については不明であるが、1号集石は縄文時代早期のものだと判断した。集石の石はほとんどが熟変し、脆く砕けた礫が多い。付近には伴出する土壌もなく、焼成の痕跡とされる焼土も確認されないことから、一度別の場所で焼かれ、使用された礫がこの場所に廃棄されたものと理解したい。

16基確認された土壌は、ほとんど時代決定に足る資料を欠き、その用途についても不明である。分布状況は、調査区中央の配石遺構周辺とそれからやや離れた東側に多く存在する。形態

は、長軸 2 m 程の長方形と直径 1 m 以内の円形が認められる。長方形プランを呈するものは長軸方向を東西方向に一致するものが多く、時代・用途に一定の同一性が想起される

以上の調査結果は上野原インターチェンジの導入路部分の発掘によるもので、さらに東側のインターチェンジ本体に関わる調査を引き続き日本道路公団の委託を受けて実施している。したがって、関山遺跡全体の発掘調査の内容は「関山遺跡Ⅱ」をあわせて検討したい。

参考文献

文化庁 『全国遺跡地図』 1981

磯貝正義ほか 『角川日本地名大辞典19 山梨県』 1984 角川書店

板本美夫 「甲斐の郡（評）郷制」 『研究紀要』 1983 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

八巻與志夫 「古代甲斐国の郷配置の基礎的操作」 『山梨考古学論集Ⅰ』 1986

上野原町 『上野原町誌』 1975 上野原町誌編纂委員会

長谷川孟ほか 『牧野遺跡・大倉遺跡・大堀Ⅰ遺跡』 1980 上野原町教育委員会

中山誠二ほか 『上野原遺跡・智光寺遺跡・切附遺跡』 1987 山梨県教育委員会

長沢宏昌・中山誠二 『一の沢西遺跡・村上遺跡・後呂遺跡・浜井場遺跡』 1986 山梨県教育委員会

图 版



遺物出土状況



完掘状況（東より）



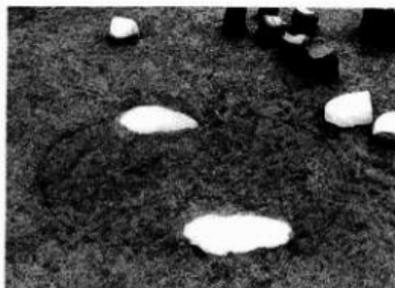
完掘状況（南より）



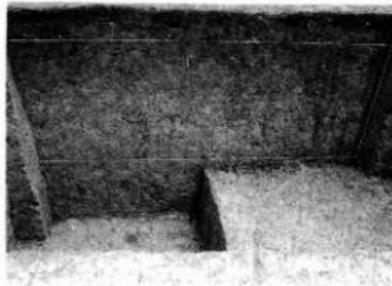
入口部



埋 壺



炉 址



基本層序



1号配石



1号配石及び15号・16号土坑



1号集石



1号集石



2号集石



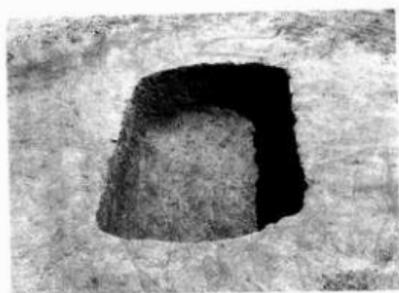
1号土坑



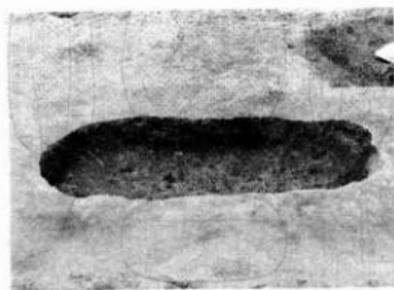
2号土坑



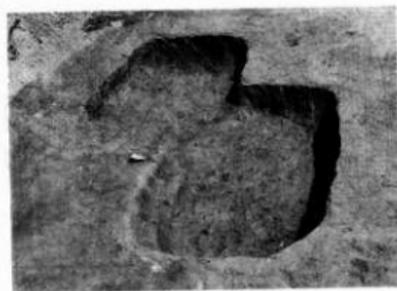
3号·4号土坑



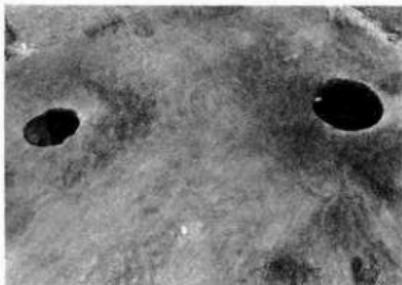
5号土坑



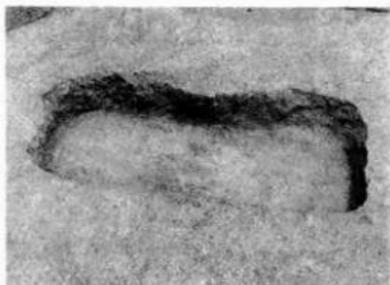
6号土坑



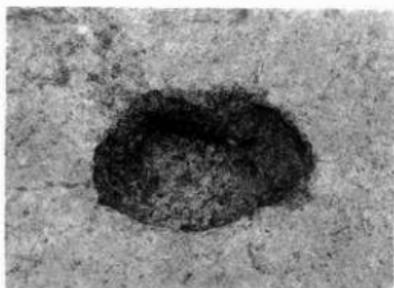
8号·9号土坑



10号·11号土坑



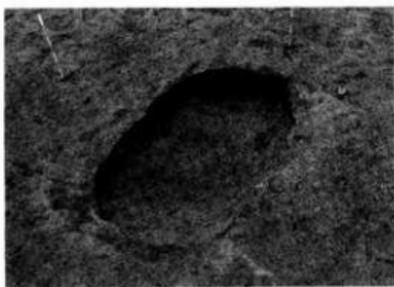
12号土坑



13号土坑



14号土坑



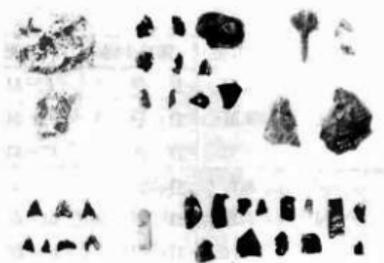
15号土坑



16号土坑



1号住居址出土土器



石鏃・石錐・浮子状石器・剝片



溶 岩



(表)

(裏)

打製石斧



(表)

(裏)

打製石斧

出土石器



磨石及び凹石



その他の石製品



石皿及び凹石



磨石



多孔石



石皿状石器

出土石器

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第36集

関 山 遺 跡 I

印刷日	昭和63年3月25日
発行日	昭和63年3月31日
編 集	山梨県埋蔵文化財センター
発行所	山 梨 県 教 育 委 員 会
印刷所	備 峽 南 堂 印 刷 所

